

2012年5月19日

「山田理論と南理論の継承と発展への一視角－「文明」危機の視点から－」

久保 新一

はじめに

3.11 東日本大震災（地震、津波、原発事故）、(1)「想定外」、(2)復興策・混迷

社会科学は解答を準備しえていないのではないか。社会科学はいかなる意味で行き詰まり、その限界をどう打破すべきか。二人の先人（山田盛太郎、南克己）の業績を手掛かりに検討する。

## I 山田盛太郎

### 1. 戦前日本資本主義分析（『日本資本主義分析』岩波書店、1934年（『著作集』第二巻））

マルクス再生産論の戦前（戦後）日本資本主義分析への具体化

軍事的半封建的資本主義（「軍封構成」）

変革主体（「プロレタリアート」）による「民主的および社会主義的な全一連の変革」（第二巻、185頁）

### 2. 戦後日本資本主義分析

#### 1) 農地改革研究

(1) 「農地改革は「軍封構成」を再編、…日本経済再建の新しい基礎（土地所有＝農業経営の再編）を確立する方向を規定している点において革命的である。しかし、農地改革そのものは全過程の端緒をなすものに過ぎず、…本格的農業への技術的基礎（大農圃への基礎）の構築へ進むことによって完結するものである」（「農地改革の歴史的意義」1949年10月、『著作集』第四巻、48-49頁）

(2) 「日本資本主義の戦後第一階梯において、第II部門が規制的である場合に、その基礎過程として農業第一階梯の急上昇があり、資本主義第二階梯において、第I部門が規制者となり本格的蓄積的段階になった場合に、工農格差が顕在化し、農業第二階梯での停滞と解体に向う－この階梯にあつては、日本農業は、突如として一個の龐大な資本プロパーに対する労働力の供給基盤に転化されてしまう－」（「戦後再生産構造の段階と農業形態－ $Iv+m=IIc$  および蓄積の Schema の崩壊と再編－」1964年3月、『著作集』第五巻、32頁）

(3) 「土地国有論」の提起（「1967年秋季学術大会共通論題「農業解体における土地所有形態の再検討」土地制度史学会『60年の歩み』2008年3月、36-37頁）

#### 2) 戦後日本資本主義分析

(1) 「戦後日本では重化学工業化が一つの至上命令となった。それは日本資本主義それ自体における内発的必至性であった。それは日本をソ・中に対する「防壁」として位置づけようとするアメリカ帝国主義の世界戦略とまさに合致するところで、その線と結びついた。その時から、一個の至上命令となった。ここから鉄鋼業を主軸とする重化学工業の

本格的構築が開始される」(「戦後再生産構造の基礎課程」1972年3月、『著作集』第五卷、39頁)「鉄鋼業＝機械部門での生産＝再生産の形態は、通常の経済循環の形を破っている」(同、83頁)

(2) 鉄鋼研究(南克己「山田先生と戦後段階＝鉄鋼分析」『土地制度史学』第93号(「故山田盛太郎先生追悼特集」)、1981年10月)

### 3. 評価

(1) 再生産論の具体化、(2)「軍封構成」析出、(3)歴史的・地理的条件、土地所有・農業形態のあり方が日本資本主義の特殊構造を規定している、とみている、(4)特殊の普遍への止揚

## II 南克己

1. アメリカ資本主義(「冷戦」帝国主義)分析(「アメリカ資本主義の歴史的段階－戦後＝「冷戦」体制の性格規定－」『土地制度史学』第47号、1970年4月)

1) アメリカ資本主義の歴史的基礎

A「本来的植民地における資本主義」、B「大陸的広がりを持つ植民地＝資本主義」(同、2-6頁)

2) 「冷戦」帝国主義・アメリカの基礎範疇

国家独占的＝軍事的統体 IB(「R&D産業」9、14頁)

2. 戦後日本資本主義分析(「戦後重化学工業段階の歴史的地位－旧軍封構成及び戦後＝「冷戦」体制との連携－」『新マルクス経済学講座第5巻・戦後日本資本主義の構造』有斐閣、1976年10月)

1) 「軍封」地盤の踏襲

2) 「冷戦」体制(「冷戦」帝国主義)への編入

3) 「冷戦」植民地的格差・系列編制、「加工モノカルチャー型構造」

3. 冷戦体制解体過程のダイナミズム

1) 冷戦体制解体第一階梯(「冷戦」体制解体の世界史的過程におけるアメリカ資本主義－ME化とアジア化を軸線として－)『1986年土地制度史学会秋季学術大会・報告要旨』1986年10月)

デタント(69年)、金・ドル交換停止(71年)画期

(1)ME革命(R&D主導型産業の成立・展開)

(2)東アジア NICS の登場(「アジア化」)

(3)英米リストラクチュアリング、ソ連ペレストロイカ

2) ポスト冷戦(「冷戦体制解体とME＝情報革命」『土地制度史学』第147号、1995年)

ソ連・東欧社会主義崩壊(89-91年)、中国・インド開放体制転換(91-92年)画期

(1)IT革命(インターネットによる世界の包摂、「Net新世界」)

(2)新興国(BRICS)台頭

(3)先進工業国産業「空洞化」・金融危機

#### 4. 評価

(1) 「軍封」地盤の踏襲、アメリカ資本主義の歴史的基盤。(2) IB (R&D 産業) 範疇の析出、(3) 冷戦体制解体過程のダイナミズム分析、(4) 特殊の普遍への止揚

### III 世界経済の現状

ポスト冷戦世界：①地球環境問題、②ソ連・東欧社会主義の崩壊、③IT・グローバル化と新興国台頭、④先進工業国（米・EU・日）工業空洞化・金融危機

\*工業を基盤とする「諸国家の体系」（近代）の行詰り・破綻

### IV 新しい地平への一視角—南 IB・冷戦体制解体ダイナミズム論を手掛かりとして—

1. 坂田理論（坂田昌一「現代科学の現代性」『現代講座 哲学 VI、自然の哲学』岩波書店、1968年12月）

現代科学：「19世紀の機械文明がニュートン力学であったと同じように、現代の技術革新は原子の世界を支配する量子力学に負うところが多い」（363頁）

<現代科学の特徴>

- (1)あらゆる法則が適用限界を持っている。
- (2)自然は異なる無限の階層からなり、各階層は固有の法則が支配している。社会は自然の中の階層の一つであり、自然科学と社会科学は連なっている。
- (3)自然界の中では、異なった階層がたえず出来たり消えたりしながら歴史をもって進化している。
  - ・近代科学は、対象をバラバラに切断して各部分を詳しく研究するが、現代科学は原子物理学の発展を軸にかつてないほど統一性をもつようになった。

2. 近代科学と現代科学（米沢富美子『人物で語る物理入門、上・下』岩波書店、2005年）

(1)近代科学（科学革命の17世紀、蒸気機関の18世紀、電気と磁気の19世紀）

①対象：「森羅万障・自然の営み」、②方法：「実証主義」（一切の形而上学的思弁を排す）  
ルネ・デカルト（1596-1650）『方法序説』、「考える自分」の発見、心身二元論、要素還元論（①明晰性の原則、②分析の規則、③総合の規則、④枚挙の規則）

アイザック・ニュートン（1642-1727）『プリンピキア』（1686）、「驚異の2年」（1655-7）  
（①微積分法、②万有引力の法則、③光学に関する発見）

「同一法則が全宇宙を貫いて支配する」

- ・ジェームス・マクスウェル(1831-1879)「電磁気学」（光の本質は電磁波）
- ・ルードリヒ・ホルツマン(1844-1906)「熱力学」（第一法則：エネルギー保存の法則、第二法則：エントロピーの法則）

(2)現代科学

マックス・プランク(1858-1947)「エネルギー量子仮説」(1900)

アルバート・アインシュタイン(1879-1955)「奇跡の年」(1905) (①光電効果、②ブラウン運動、③特殊相対性理論 (一般相対性理論 (1915)))

コペンハーゲン解釈(1927) (ニールス・ボーア (1885-1962)「相補性原理」、ヴェルナー・ハイゼンベルグ (1901-1961)「不確定性原理」)「量子力学」確立  
「古典力学の因果律に対し確率的性格を持つ」(「神はサイコロ遊びをしない」アインシュタイン)

\* 「不確定性原理」は相対性理論による「絶対の否定」と共に 20 世紀の哲学・思想に大きな影響を与える。(「現在を正確に知ることは不可能」「未来は確率的にのみ予言できる」)

### 3. 現代科学の発展

「究極の物質の科学的探求が BC5 世紀に提起された原子論を超えて大きく前進したのは 20 世紀に入ってからである。さまざまな疑問や理論を持ちながら、近代の科学者は極微の世界を探ってそれらを検証する技術を持ち得なかった」(松井孝典『宇宙誌』岩波現代文庫、2009 年 10 月、25 頁)

「新しいパラダイムに導かれて、科学は新しい装置を採用し、新しい土地を発見する。さらに重要なことは、革命によって科学者達は、これまでの装置で今まで見慣れてきた場所を見ながら、新しく全く違ったものを見るということもある」(トーマス・クーン)

#### (1) IB 段階 (1940-1970)

1911、ラザフォード放射線同意元素から放射されるアルファ線によって原子核 (10-12 乗) 発見 (極微の世界を探知する方法論の発見)。1913、ボーア、原子モデル提唱

1930、ローレンス、サイクロトロン (1 兆分の 1 ミリ、10-12、素粒子レベル)

1942、エンリコ・フェルミ、シカゴ大学で核分裂連鎖反応実験成功、8 月マンハッタン計画スタート、1945.7.16 原爆実験成功、同 8.6、9 広島・長崎原爆投下、1955、「ラッセル・アインシュタイン声明」(核兵器反対声明)

1946、ENIAC (幅 30m,高さ 3m,奥行 1m,全重量 30t,真空管 1 万 3 千本) コンピュータ

1947、ジョン・バーデン、トランジスタ発明。1950、プログラム内蔵式コンピュータ EDVAC。1956、ソニー・トランジスタラジオ。1960 年代後半から 40 年で 100 万倍

1948、ガモフ「ビッグバン理論」、1960 年代ペンシラスとウィルソンにより復活。

パロマ山天文台 (口径 5 m 反射望遠鏡完成)、1951、電波望遠鏡

1953、ワトソン・クリック「DNA 二重らせん構造」発見 (分子生物学の誕生)

1957、ソ連・人工衛星打上成功 (スプートニク・ショック)、1961、ボストーク 1 号

1958、NASA、1969、アポロ 11 号月世界着陸成功-17 号 72 年 12 月まで

「20 世紀はアポロ 11 号の打上げをもって終わった」(ノーマン・メイラー)「20 世紀というにふさわしいまとまりを持った時代は I 大戦後から 1970 年前後まで」(松井、8 頁)

## (2)ME 段階 (1971-1990) (ME と重化学工業の接合)

1971、インテル、1kDRAM、4 ビット MPU 開発。1973、8 ビット MPU。衛星通信実用化。1975、PC 用 Basic ソフト (マイクロソフト社)、1976、アップル社 (ジョブズ) 1978、16 ビット MPU。欧州共同体 EUNet、公衆パケット交換網サービス開始(仏)。1979、64kDRAM。ME・自動化、ロボット化。

1981、PC 用 MS-DOS、IBM/PC。1984、PC マッキントッシュ。研究者用ネット (JUNET)、公衆パケット交換網各国で構築。電電公社-NTT へ (日)。1987、データ通信自由化。

・情報産業 (ハード・ソフト・ネット (光・衛星)) 成立  
新単位革命 (ミリ→ $\mu$ ・s $\mu$ )、コンピュータと工作機械の接合による。

## (3)生命と地球の研究：1980 年ごろから急速に発展

研究用観測・計測機器もコンピュータと接合、計測・観測技術の発展、情報科学の発展・情報産業成立とネットワーク化 (研究者用ネット)

1970 年代末~80 年代「生命科学・興奮の時代」(内井惣七『ダーウィンの思想』岩波新書 2009 年 8 月。榊佳之『ヒトゲノム』岩波新書、2001 年 5 月)

1977、DNA の塩基配列決定技術。1981、DNA 配列決定自動化装置。1991、ヒトゲノム計画 (2000 年 6 月完了)。X 線写真技術、1 万倍を超える電子顕微鏡。分子生物学は生命現象と物理・化学現象との間を地続きとし飛躍的発展の道を開いた。ダーウィン進化論、メンデル遺伝の法則を根拠づけ、生命科学を成立させた。「遺伝子は一つ一つが機能・能力を持つが、それらが単独で働くことは少なく、ふつう多様な遺伝子が相互に関連しながら働き一連の生体反応を成り立たせている」。生物情報の特徴：多様性とあいまいさ。

地球科学 (丸山茂徳・磯崎行雄『生命と地球の歴史』岩波書店、1998 年 1 月)

1970 年代、「プレートテクトニクス」理論、生命誕生とその進化のメカニズム解明

1980 年代、X 線 CT 技術と地震波トモグラフィー手法で地球の内部構造解明、総合的な地球の変動システムの理解進展。

1990 年代、固体地球と生物圏進化、統一的に説明可能に、

認知科学 (安西祐一郎『心と脳-認知科学入門』岩波書店、2011 年 9 月)

1980 年代半ばから 90 年代にかけて脳活動計測装置 (コンピュータ断層撮影 (CT) スキャナー、磁気共鳴映像法 (MRI)) の普及により認知科学研究大発展。心の働きを「情報」概念をもとにして理解しようとする営み (認知科学)。心は感情や社会性や記憶、思考のようないろいろな要素的な機能が相互作用して働く情報処理システム。「心と脳の働きが個人と環境との「関係」の中にある」(ギブソン)

\*心身二元論の超克 (主客相互依存性)

「生命を含む自然の統一的理解を飛躍的に発展させた」

「哲学が「万学の女王」の玉座を去り、ニーチェが「神の死」を宣告してから久しく、その空位は現在では科学によって埋められようとしている。哲学を領導してきた「理性」の特権的地位もそれが身体やジェンダーを持ち暴力や狂気と背中合わせであることが暴露されるに及んで、今や満身創痍といっても過言ではないだろう。20世紀前半、少なくとも1960年代までは、実存主義、マルクス主義、論理実証主義という三派鼎立の図式がイデオロギ一的な対立も含めて成り立っていた。

20世紀後半にこのトリアーデが崩壊して以降も、ヨーロッパ大陸に足場を置く現象学、解釈学、フランクフルト学派、構造主義、ポスト構造主義などの大陸哲学の潮流と、英米圏を中心とする分析哲学やネオ・プラグマティズムの潮流との間には方法論の対立を孕んだ緊張関係が存在していた。

しかし、21世紀を迎えた現在、既存の学派や思想潮流の間の対立図式はすでにその効力を失っている。現在の哲学状況は「中心の喪失」と呼ぶことが出来るかもしれない。哲学のアイデンティティを根底からゆるがしているのは、20世紀後半に飛躍的に発展を遂げた生命科学、脳科学、精神科学、認知科学などによってもたらされた科学的知見の深まりである。哲学と科学との境界が不分明になると共に「哲学の終焉」さえ語られるようになった」（岩波講座 哲学01、『いま＜哲学する＞ことへ』2008年6月、「はしがき」のことば）

「地球システムの中に人間圏を作って生きる生き方を文明と呼ぶ」（長岡洋介、214頁）

「地球システムに従属した人間圏から、そこから独立した人間圏へという発展、その結果人間圏は地球システムと調和しない方向へ向かい始めた」

\*経済学：「経済人の概念を中心に人間の社会的行動を分析」「近代的合理的個人の個別的効用極大化を目指す」（宇沢弘文、『哲学』第1巻付録、4頁）

#### <参考文献>

1. 海部宣男『世界を知る101冊ー科学から何が見えるか』岩波書店、2011年6月
2. 小柳義夫他著『スーパーコンピュータ・岩波講座・計算科学・別巻』2012年3月
3. 科学朝日編『物理学の20世紀』朝日選書、1999年2月
4. ハイディ・カレン「ウェザーオブザ・フューチャー」シーエムシー出版、2011年9月
5. 長崎浩『共同体の救済と病理』作品者、2011年6月
6. 寺出道雄『評伝 山田盛太郎』日本経済評論社、2008年1月
7. 山本太郎『感染症と文明ー共生への道ー』岩波新書、2011年6月
8. 加藤周一『現代ヨーロッパの精神』岩波書店、2010年9月（1959年2月）
9. 丸山真男『日本の思想』岩波新書、1961年11月
10. 色川大吉『明治の文化』岩波書店、2007年1月（1970年）
11. 長岡洋介『量子力学とはなんだろう』岩波ジュニア新書、2003年4月

12. ウイリアム・ソウルゼンバーク『捕食者なき世界』文芸春秋社、2010年9月
13. 日本認知科学会編『認知科学辞典』共立出版、2002年
14. 『情報科学辞典』岩波書店、1990年5月
15. オックスフォード『地球科学辞典』朝倉書店、2004年5月
16. 『岩波・生物学辞典・第4版』1996年
17. ナオミ・クライン『ショック・ドクトリン、上・下』岩波書店、2011年9月
18. 坂田昌一編『人間と自然』有斐閣、1959年7月
19. 海部宣男・宮下勝彦『すばる望遠鏡の宇宙』岩波新書、2007年7月
20. 丸山茂徳『地球温暖化論に騙されるな』講談社、2008年5月
21. 田中敬一『ぶらりマイクロ散歩－電子顕微鏡でのぞく世界』岩波新書、2010年8月
22. 同『超マイクロ世界への挑戦－生物を80万倍で見る』岩波新書
23. リチャード・フォーティ『生命40億年全史』草思社、2003年
24. 浅倉誠他著『ダーウィンの世界－ダーウィン生誕200年』日本学術協力事業団、2011年2月
25. 佐倉統編著『科学の横道』中公新書、2011年3月
26. 柳澤桂子『「いのち」とはなにか－生命科学への招待』講談社学術文庫、2000年12月(1989年)
27. 岩波講座・哲学V『社会の哲学』1969年4月
28. 岩波講座『転換期における人間・1、生命とは』1989年6月
29. 新岩波講座・哲学1、『いま哲学とは』、1985年5月
30. 同・15『哲学の展開、哲学の歴史2』1985年11月
31. 同・6『物質・生命・人間』1986年3月
32. 岩波講座・現代思想1『思想としての20世紀』1993年5月
33. 岩波哲学講座15『変貌する哲学』、2009年7月
34. 森田邦久『量子力学の哲学』講談社現代新書、2011年9月
35. 村山斉『宇宙は何で出来ているのか』幻冬舎新書、2010年9月
36. 松原隆彦『宇宙に外側はあるか』光文社新書、2012年2月
37. 中沢新一『日本の大転換』集英社新書、2011年8月
38. 内山節『文明の災禍』新潮新書、2011年9月
39. 内山節『共同体の基礎理論』農文協、2010年3月
40. 小原秀雄『現代ホモ・サピエンスの変貌』朝日新聞社、2000年8月